In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	子どもの読書活動の現状分析 ： ヤングアダルトを中心に
Author	村木, 美紀
Citation	情報学. 4 巻 2 号
Issue Date	2007
ISSN	1349-4511
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学創造都市研究科情報学専攻
Description	
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

子どもの読書活動の現状分析：ヤングアダルトを中心に

Analysis of Reading Activity for Young Adult

村木美紀[†]

MURAKI　Miki

概要：ヤングアダルト層の読書状況を探るために，既存の読書調査の分析と考察を行う。取り上げるのは，「学校読書調査」と「小・中学生の読書活動に関する調査」とし，これらの分析から，ヤングアダルトはある程度読んでいること，また強制ではなく自らの意思で自ら読書材を選んで読んでいること，ケータイ小説やメディアミックスの流行が読書にも反映されていることが明らかになった。

キーワード：読書，ヤングアダルト，小学生，中学生，高校生

Keywords：Reading，Young Adult，Youth，Teen

1　はじめに

この情報化社会において，紙媒体資料だけでなく，インターネット情報資源やマスメディアなどを通じて盛んに情報発信が行われている。その中からどのように情報を取捨選択し，活用するのかといった情報リテラシーの取得はもはや必須である。一方で経済協力開発機構（OECD）の生徒の学習到達度調査（PISA 調査）の結果分析から日本の生徒の読解力低下が取沙汰されるたびに，活字離れへの危惧と読書の必要性が叫ばれている。

近年では国や各自治体における子どもの読書活動推進計画，学校での読書指導や全校一斉読書(朝の 10 分間読書)の導入などの取り組みがみられるが，ヤングアダルト層の読書実態はどのようなものであろうか。本研究では現状を探るとともに，今後の課題を提示したい。

2　研究方法

ヤングアダルト層の読書状況を把握するために，既存の読書調査を分析する。取り上げるのは，全国学校図書館協議会と毎日新聞社が毎年行っている「学校読書調査」[1]と岩槻らによる「小・中学生の読書活動に関する調査」[2]とする。なお，日本においてヤングアダルトとは中学生・高校生を中心とした十代と捉えられており，当該調査の対象は小学 4 年生－中学生・高校生ということでその範疇であると考えてのことである。

3　分析

3.1「学校読書調査」

3.1.1 調査の概要

対象としたのは最新の「第 53 回学校読書調査」（2007 年）である。本調査は全国学校図書館協議会と毎日新聞社が毎年実施しており，『学校図書館 11 月号』[3]誌上において報告がなされている。

本調査では，5 月 1 ヶ月間における図書/雑誌の読書状況を小学校 4 年生から高校生までに尋ね，性別・学年別に分析している。全体の調査項目は次の通り。

(1) 読んだ本の量・読んだ本の内容
(2) 読まなかった理由
(3) 読んだ雑誌の量・読んだ雑誌の内容
(4) どのくらいマンガを読むか
(5) 全校でいっせいに本を読む時間

ここでは本（ただし，ゲーム攻略本・マンガ・学習参考書は除かれている）の読書状況を中心に取り上げ，分析・考察を行う。

[†]同志社女子大学 学芸学部 情報メディア学科

3.1.2 読書量

1ヶ月の読書量は小学生が 9.4 冊，中学生が 3.4 冊，高校生が 1.6 冊であり，学齢が上がるにつれて読書量が減少している。高校 2 年生を除く他の校種・学齢において女子が男子を上回っている。ただし，中学生はわずかながら経年で増加，高校生はほぼ横ばい傾向にあった。報告では，中学生の読書量が増えているのは⑴シリーズ作品の人気，⑵ケータイ小説のヒット，⑶全校一斉読書の定着と分析している。

⑴のシリーズ作については,「バッテリー」,「ハリー・ポッター」（ただし調査年度に新刊の出版はなし），「ブレイブストーリー」などの多巻ものによる読書習慣の形成を理由として挙げている。これは「全校でいっせいに本を読む時間」の充実のための希望を聞いたところ「学校図書館に魅力的な本をそろえる」,「学級文庫に魅力的な本をそろえる」との回答が上位にあったことにも関連があるといえよう。

⑵のケータイ小説は，トーハンの 2007 年売上げランキングで, 文芸部門の上位 10 タイトル中 4 タイトルがランクインするほど勢いがある [4]。またケータイ小説最大手サイト「魔法の i ランド」では月間閲覧件数が 33 億件を記録し（2007 年 12 月），ネットエイジアが実施した「高校生のケータイ利用実態調査結果：ニュージェネレーション世代のケータイ 2007 最新事情」では，女子がケータイでよくみるのは「ケータイ小説」であるという回答が 53%でトップ，男子でも 21.8%で 3 位，全体では 37.4%・2 位との結果が出ている [5]。

⑶の本調査における全校一斉読書とは，朝の読書だけでなく, 休み時間や放課後を活用したもの, 週時程に組み込まれたもの，テーマを設定した読書，教師やボランディアによる読み聞かせやお話会などの取り組みも含むなど，幅広いものとなっている。

なお，全校一斉読書をきっかけに「本を読むことが増えた」,「本を読むことが好きになった」という前向きな意見が多いものの,「本を読むことが嫌いになった」という意見も少なからずみられること，学校における取り組みであるにも関わらず「先生と本の話をするようになった」という回答が著しく低いことは残念である。

また，全校一斉読書を実施していない学校で全校一斉読書の時間があったほうがよいかを問うたところ, 積極的に導入を望む声は強いとは言えず, 全校種において「どちらでもいい」という回答が最も多い。男子は「なくていい」と考える傾向にあり，全体的に強制的な読書を歓迎していないことが伺える。

3.1.3　不読者

不読者については，小学生で 4.5%，中学生で 14.6%と調査以来最も低い数値であり，高校生は 47.9%と小・中学生には水をあけられているものの，過去 2 番目に低い数値を記録していることから，不読者は減少傾向にあることが指摘できる。

学齢が下がると不読者も減り，全ての校種・学齢において，女子のほうが不読者が少ない。

なお不読の理由として，約半数が「読みたいと思わなかった」と答えている（下図）。男女でみると男子の方がその比率は高い。しかしながら，10 年前の調査と比較すると全校種とも数値は減少している。

不読者で読みたいと思わなかった回答率

	2007 年	1997 年
小学生	54.4%（男子 57.7%；女子 43.2%）	64.0%
中学生	59.3%（男子 59.5%；女子 59.0%）	74.2%
高校生	53.7%（男子 59.3%；女子 46.9%）	74.5%

同じく不読者のうち,「読みたかったが読めなかった」と回答した子どもにさらにその理由を尋ねたところ，以下の通りであった。

＜小学生＞

1. 読みたい本がなかった　43.5%
2. 友だちと過ごしたり話したりして時間がなかった　23.9%
3. 勉強・塾・習い事で時間がなかった　21.7%

＜中・高校生＞

1. 部活動で時間がなかった
   中学生 51.8%；高校生 51.7%
2. 勉強・塾・習い事で時間がなかった
   中学生 42.3%；高校生 43.9%
3. 読みたい本がなかった
   中学生 39.9%；高校生 30.2%

校種を問わず上位 3 回答中 2 回答は同じであるが，中・高校生の理由の一番が「部活動」であり，小学生の理由の 2 位が「友だちと過ごす」であるところに違いがみられる。調査では「読みたいと思わなかった」と回答した子どもにさらにその理由を尋ねている。

＜小学生＞

1. 本よりマンガや雑誌のほうがおもしろい
2. 本よりテレビやビデオ，ゲームのほうがおもしろい
3. 友だちと過ごしたり話したりしているほうが楽しい

＜中学生＞

1. 本よりマンガや雑誌のほうがおもしろい
2. 友だちと過ごしたり話したりしているほうが楽しい
3. ふだんいつも読まない

＜高校生＞

1. ふだんいつも読まない
2. 本よりマンガや雑誌のほうがおもしろい
3. 友だちと過ごしたり話したりしているほ うが楽しい

上位 3 回答には入っていないが，「本を読むのがきらい」(小学生 29.9%：中学生 21.5%；15.6%)，「本を読むのはめんどうだ」（小学生 21.8%：中学生 20.3%；19.4%）という読書に対して消極的な回答も低い数値だとは言えない。この 2 回答については，学齢が低い方が数値が高いという特徴がある。

なお，詳しくは触れないが，ふだん読んでいる雑誌は，小学生の男女と中・高校生の男子ではマンガが上位を占めている中，中・高校生の女子はファッション雑誌の人気が目立つ。よく読んでいる雑誌にはマンガ雑誌が多く，不読理由に「マンガや雑誌のほうがおもしろい」があったものの，本調査での「どのくらいマンガを読むか」などのマンガ調査に関する詳細については取り上げないこととする。その理由は，報告において「聞き方がちょっと不適切であったのか，分析しづらい結果になってしまった。(中略) 問いかけの方法についてもっと慎重に詰めていかなければいけなかったと反省している」とあることや，マンガでの読書よりも「コミック本の購入状況」に主眼が置かれているかのような分析となっていることによる[6]。

ただ，次に取り上げる「小・中学生の読書活動に関する調査」や、その他 NHK 放送文化研究所の「国民生活時間調査報告書」[7] の最新調査においてはマンガも本と同様に取り扱っていること，メディアミックスとしてマンガは重要な対象であることなどから，今後の調査ではマンガをも含めた調査範囲の検討を再考する余地があるかもしれない。

3.2「小・中学生の読書活動に関する調査」

3.2.1　調査の概要

次に岩槻らの「小・中学生の読書活動に関する

調査」を取り上げる。回答対象は，小学生４年生と中学２年生で，以下の８つの視点による設問項目が設定されている。

(1) 直近１ヶ月間の読書量
(2) よく読む本のジャンル読書中や読書後にとる行動
(3) 読書中や読書後にとる行動
(4) 読書の目的
(5) 読書のきっかけ
(6) 不読の理由
(7) １日あたりの本以外のメディア利用時間
(8) 身近に本を薦める人の存在

ただし，本調査は「紙幅の都合上，すべての結果を示すことができないゆえ，主なものに限って簡潔に記述」[8] されており，調査の全報告や詳細な分析は不明である。よって本稿は報告論文から分かりえる範囲による記述であること，数値は同報告から分かりえる数値を用いたことを付け加えておく。

3.2.2 読書量・ジャンル

直近１ヶ月の読書量について，何らかの形で読んだとの回答が，小学生で 91.8%・中学生は約 75%（報告書では「約 3/4」と記述），不読者は小学生が約 3%・中学生が 13.5%である。中学生よりも小学生の方が読んでいることが分かる。ただし，対象には小説などの図書のみならず，マンガ・雑誌・ゲーム攻略本・教科書・図鑑や事典をも含むとしていることを考えると，読書率は 100%でもおかしくないのではないか。もしくは学外や家庭でなど読書に条件がついていたのか。報告からは不明であった。

よく読む本のジャンルは小・中学生の男女ともに「マンガ」がトップであり，その数値は群を抜いている。小学生は男女で２位以降のジャンルに類似点が見られないほどに異なる。中学生は男子が４位にゲーム攻略本が，女子の６位に推理小説がランクインしているのを除くと，似たような並びとなっており，「雑誌」や「趣味に関する本」が上位に位置している。小説では「ファンタジー」の人気が高い。小学校・中学校限らず男女で分析すると，男子は「ゲーム攻略本」が，女子は「ファンタジー」を好むという特徴がみられる。

3.2.3 読書の動機

読書中や読書後にとる行動，読書の目的，きっかけについても調査がされていて非常に参考になる。

読書中や読書後にとる行動では，小・中学生ともに「映画化・テレビ化されたものを見る」（小学生２位・49.7%；中学生１位・53.4%）が高い。ただし，小学生の１位回答は「本の続きを想像して楽しむ」（54.1%；中学生では４位・27.9%）であるのに対し，中学生の２位は「友だちとその本の内容を話し合う」（50.1%；小学生では 5 位・37.6%）という違いがみられる。

読書の目的では「国語の成績があがるから」,「調べ学習のため」という学習目的の回答は小・中学生ともに低く,「おもしろいから」がともにトップ回答であった（小学生 83.7%；中学生 88.1%）。それ以降の上位回答をみても，自分の意思で自分のために読んでいることが分かる。小・中学生での違いとしては，「感動できるから」が中学生は 40.7%・4 位なのに対して，小学生は 30.3%・8 位であるという差異がみられる。興味深いのは「友だちと同じ話ができるから」（小学生 31.4%；中学生 28.3%でともに６位）と，読書をコミュニケーションツールとして用いている点である。

読書のきっかけでは小・中学生ともに「本屋で見かけて」（小学生 60.0%；中学生 70.5%）が 2 位以下を大きく引き離してトップである。「アニメや映画・テレビ番組で見て」（小学生 45.8%・2 位；中学生 43.3%・3 位）なのは，先に確認した読書中・読書後にとる行動と合わせて考えると昨今のメディアミックスのブームが根強いことが指摘できる。また，何らかのかたちで現物を手に取ったり存在を確認した上で読んでいること，中学生は「友人のすすめで」（45.7%・2 位）や「ベストセラー・話題の本だから」（38.0%・5 位）が大きなきっかけになっていることが分かる。「先生のすす

めで」は小・中学生ともに 12 項目中「その他」よりも低い最下位回答であり,「親のすすめで」と比較しても 3 割程度の数値でしかない。なお，学校図書館や公立図書館で知って・すすめられてといった“図書館”に関する項目が設定されていなかったようであり，残念である。

3.2.4　他のメディアの利用時間

1 日あたりの本以外のメディア利用時間についての設問も興味深い。詳細は不明ながら，TV，ビデオ，DVD，テレビゲーム，電子メール，電話の項目が確認できる。

小学生の TV 視聴時間で回答率が高かったのは「1 時間以上 2 時間未満」(30.2%),「30 分以上 1 時間未満」(23.3%)であること,テレビゲームは「全くしない」,「30 分未満」,「30 分以上 1 時間未満」の合計回答が 60%を越えているなど，子どものテレビ・ゲーム好きがメディア利用時間には反映されているとは言い難い。中学生ではテレビの視聴時間の比率が高くなっていること，小学生と比較して，本以外のメディアの利用時間が総じて増加していることがわかった。ここでの分析からは，TV やゲームのために読書をしない／できないのではないことが指摘できる。ただし，小学生は 4 年生と年齢が低いこと，人気が高いはずのニンテンドーDS といったポータブルゲーム，ケータイ，インターネットが項目に含まれていなかったことなどから，現状が顕著に表れているかは疑問に思われる部分がある。

4　考察

以上，既存調査を元に分析と考察を行った。その結果，(1)小・中学生ともに何らかの紙媒体を読んでいる，(2)ただし教科書，マンガ，雑誌までを含むジャンルを問わない読書であっても不読者はいる，(3)メディアミックス化に敏感である，(4)友人のすすめで読み，友人と内容について話すなど，コミュニケーションツールとして活用している，(5)自分のために自分の好みで自分で現物を確認した上で読むこと，が明らかになった。

分析を行った 2 調査では，教育目的の読書，教育か楽しみかを問わない読書を問うかの違いから設問項目や調査範囲にも差異が表れていた。米谷が指摘するように [9]，読書の定義や読書材の範囲が明確に統一されていない，読書活動には本の貸出・お話会への参加・読書感想文の執筆なども含むとしている自治体がある一方で「本を読むこと」＝「読書をすること」と扱われている，紙媒体以外のメディアを読むことは読書の範疇とされていないという状態での調査であることが見え隠れし，調査する側の大人と回答する側のヤングアダルトに乖離が生じるなら，現状に即した実態把握が困難になる。今後の調査では，その前提を整理することが求められよう。

5　おわりに

ヤングアダルト層が何らかを読む行為を日常的に行っているにせよ，メール・SNS（Social Networking Servise）・チャットなどで短文や略語に慣れ親しんでいる傾向にあることも多く，読解・評価・表現といった情報リテラシーの取得について意識した継続的な取り組みが必要なことは否めない。さらに，これからはメディアの多様化とともに，ますます多くのメディアに触れる機会が増えることとなる。近年ではケータイ小説・ケータイコミック，インターネット，ニンテンドーDS ソフト [10] での読書材の提供も活発になっているし，作品のヒットの鍵のひとつにメディアミックスがある。そのことも意識して読書活動の推進や読書材の提供を行うことは学校・図書館・書店といったあらゆる機関にも有効であると考える。今回の調査分析からヤングアダルトは，自分の興味で自分のために読む，コミュニケーションツールの一環として読むという現状が明らかになった。読書とメディア利用の多角的な関係について，今後も注目していきたい。

---

[1] 全国 SLA 研究・調査部「第 53 回学校読書調査報告」『学

校図書館』685 号，2007.11，p12－35.

[2]岩槻和也「子どもたちは本とどのようにつきあっているのか？：小・中学生の読書活動に関する調査から」『社会教育』2007 年 9 月号(no.735)，p20－24.

[3]全国学校図書館協議会編『学校図書館』全国学校図書館協議会・年刊

[4]トーハンによる年間売上ランキングによると，文芸部門の上位 10 タイトル中 4 タイトルがケータイ小説であった。

トーハン「2007 年年間ベストセラー発表」（検索日：2007 年 12 月 4 日）

日販の年間売上ランキングでも，多少順位は異なるものの，上位 10 タイトル中同じく 4 タイトルのケータイ小説がランクインしている。

本やタウン「年間ベストセラー2007 年度」（確認：2007-12-04）

http://www.honya-town.co.jp/hst/HT/best/year.html#02

[5]『日本経済新聞』2008 年 2 月 13 日朝刊

ネットエイジア「高校生のケータイ利用実態調査結果：ニュージェネレーション世代のケータイ 2007 最新事情」（確認：2008-03-30）

http://www.mobile-research.jp/investigation/research_date_071129.html

[6]末次則子「マンガ雑誌よりコミック本：コミック本の購入状況」『学校図書館』685 号，2007.11，p29－30.

[7]NHK 放送文化研究所「2005 年国民生活時間調査」NHK（確認：2008-03-30）

http://www.nhk.or.jp/bunken/new_06021001.html

メディアの項目として，2000 年調査では「雑誌・マンガ」と「本」に分けて調査していたが，2005 年調査からは「雑誌・マンガ・本」は一括りとなっている。さらに，他のメディア項目の「TV，ラジオ，新聞，ビデオ，CD・MD・テープ」は年代，性別，属性による分析であるが，「雑誌・マンガ・本」では小学生・中学生・高校生の別がある。

[8]岩槻和也「子どもたちは本とどのようにつきあっているのか？：小・中学生の読書活動に関する調査から」『社会教育』2007 年 9 月号(no.735)，p20.

[9]米谷優子「子どもの読書活動推進計画に見る「読書」概念の分析と比較検証」『情報学』vol.4，no.1，2007（確認：2008-03-30）

http://ojs.info.gscc.osaka-cu.ac.jp/JI/viewarticle.php?id=53&layout=abstract

[10]ニンテンドーDS『文学全集』2007 年 10 月 18 日発売

（確認：2007-10-27）

http://www.nintendo.co.jp/ds/ybnj/

ニンテンドーDS『図書館 DS 名作＆推理＆怪談＆文学』2007 年 8 月 2 日発売（確認：2007-10-27）

http://www.dorasu.com/ds/library/